

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

井上円了の学位に就いて...

著者	山内 四郎
雑誌名	井上円了研究
巻	1
ページ	75-80
発行年	1981-03-19
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00006749/

井上円了の学位に就いて

山内 四郎

一

井上円了の急逝直後に、林竹次郎（古溪）が著した『井上先生行状一班』^二と題する小伝がある。それに

その後先生著作、教授、講演の際、尚印度学の研究怠らず、遂に彼の『佛教哲学系統論』を著し、明治二十九年六月八日、文学博士の学位を授けらる。これ論文によりて博士号を授けらるゝ嚆矢なりといふ。有名なる『外道哲学』は、その一部分を改修したるものなり、

と述べている。確かに、『外道哲学』は、『佛教哲学系統論』の第一編として刊行された著述であるが、その佛教とは日本佛教の意味であり、日本佛教の組織系統を説明するため、その第一編として『外道哲学』を撰述したものなのである。しかるに、『その後先生、（略）印度学の研究怠らず』との表現はいかなものであるうか。どうも、林竹次郎は『佛教哲学系統論』の全体を閲読していないのは勿論、その一部分であるとする『外道哲学』すら正確に把握していなかったのではないか。事実、『外道哲学』が予告する第二編『異部哲学』より、第十五編の『日宗哲学』^四までの刊行あるのを聞かない。すなわち『外道哲学』以外は被見することすら不可能であったのである。しかも、学位が

文学博士のみでないことは言うまでもないにもかかわらず「これ論文によりて博士号を授けらるゝ嚆矢なりといふ」と記す。この「いふ」との表現は、自分自身仔細な調査・研究によって書かれたものではない自信の無さではないか。次に、井上哲次郎による『故文学博士井上円了氏に就て』^五なる追悼文がある。これに

其頃はまだ外道哲学を能く纏めた者が無かった。所が博士が一切経中に散見している外道に関する部分を抜出して、巧にそれを分類し順序を着けて著されたものである。此書は博士的研究のものであって是が学位論文となつたのである。

と記し、同様に学位論文を言い、林竹次郎との相違は『佛教哲学系統論』と『外道哲学』それに論文博士の嚆矢としない点である。井上哲次郎の文章の大部分が記憶によって書かれているようで記憶違いがある。卒業論文についても「卒業論文は『墨子の哲学』と言うので、可なり能く出来たのであったから、之を当時大学より発行して居った『芸志林』に掲載したのである」^六と述べるが、卒業論文は『読荀子』^七であつて墨子ではない。

二

それでは、当時の学位制度はいかなものであつたろうか。明治二十年五月二十日、勅令第十三号、学位令^八第三条に

博士ノ学位ハ文部大臣ニ於テ大学院ニ入り定規ノ試験ヲ経タル者ニ之ヲ授ケ又ハ之ト同等以上ノ学力アル者ニ帝國大学評議会ノ議ヲ経テ之ヲ授ク

と定め、同年六月二十五日、文部省令第四号学位令細則^九第三条にも

文部大臣ニ於テ大学院ニ入り定規ノ試験ヲ経タル者ト同等以上ノ学力アリト思慮スル者アルトキハ帝國大学評議

会ノ議ニ付シ評議會総數三分ノ二以上之ヲ是認スルニ於テハ文部大臣之ニ博士ノ学位ヲ授ク

と記し、いずれも、学位請求論文の必要性については一言も嘔っていない。では、学位を取得したとする、明治二十九年六月八日以降とあまり時を隔てない時期の文献を閲すると、『東洋哲学』第三編第五号^{一〇}の雜報、同窓会賀筵に「去る六月八日哲学館主井上円了氏文学博士の学位を授けらる。是に於て同館出身者より成れる同窓会は、此が祝賀の筵を根津躑躅ヶ岡なる神田川に開きしが」との記事があり、同誌同卷同号に一頁に亘る哲学館同窓会広告を掲載し、館主の学位を記念し、館主の宿志である哲学館専門科及東洋図書館設立のための寄附金募集をしているが、論文については記すところがない。叡山の機閑誌『四明餘霞』第一〇二号^二、雜報に

豫ねて報せし如く文部省に於て去十日午前十時博士授与式を行ひ西園寺文部大臣は文学士井上円了氏に文学博士の学位を授けられたるが当日大学よりは浜尾総長を始め島田・外山・元良其他の各博士文部省よりは木場普通学務局長列席したる由

と、学位授与式の様子を伝え、更に

文学士 井上 円 了

明治廿年勅令第十三号学位令第三条に依り文学博士の学位を授く

と、その学位記を転載しているが、同様に論文については一言も触れていない。したがって、この学位令による文学博士であることは明瞭である。

三

何故にそれでは、林竹次郎、高島米峰などの門弟が論文の博士であるを信じ、井上哲次郎も同様であり、爾来井上^{一四}

円了の学位に就いて述べる諸書は筆を揃えて学位論文によって文学博士（及至は博士）^{一五}となった最初の人物であると書きたてているのであろうか。

これまで述べてきたところで、学位の授与が明治二十九年六月八日であることは明白であるが、翌三十年二月二十二日に『外道哲学』^{一六}を刊行している。そのまた翌年の三十一年十二月九日には、学位令が改正され、^{一七}その第二条には学位ハ文部大臣ニ於テ左ニ掲クル者ニ之ヲ授ク

と規定し、同条の第一号に

帝国大学大学院ニ入り定規ノ試験ヲ経タル者又ハ論文ヲ提出シテ学位ヲ請求シ帝国大学分科大学教授会ニ於テ之ト同等以上ノ学力カアリト認メタル者

と、始めて学位請求論文に就いて定めている。このように、『外道哲学』刊行の翌年に学位令が改正され、それに学位請求論文について定められれば、この間に因果関係が存在するかの如く誤解したとしても、止むをえないのではないか。その上、論文による第一号の博士であると考えたとしても強ち軽卒であると責められないかもしれない。

結

以上、縷説したる如く、井上円了の学位は論文によって取得したものではない。偶然にも学位授与と『外道哲学』の刊行、さらに学位令の改正とが一年毎に起り、林竹次郎、高島米峰などの門弟の著述のみでなく、先輩の井上哲次郎も誤解し、後人も安易にこれらの諸書に依拠するのみで深く考えることなく今日に至ったのであろう。

注

一、大正八年六月六日の没。

二、『東洋哲学』第二六篇第七号、井上田了先生号所収、大正八年八月刊。後にこの号は『井上田了先生』という題で単行書として刊行されている。

三、『佛教哲学系統論』第一編『外道哲学』緒言参照。

四、『真宗哲学序論』明治二十五年刊、『禅宗哲学序論』明治二十六年刊、『日宗哲学序論』明治二十八年刊、などがあるが、いずれも『外道哲学』刊行以前であり、この予告とは相違する。拙編『井上田了関係文献目録』未刊参照。

五、『哲学雑誌』第三四卷第二八九号、大正八年七月刊。

六、前掲同書。東洋哲学第二六篇第七号、井上田了先生号所収、井上哲次郎『井上田了博士』もほぼ同様である。

七、『学芸志林』第十五卷第八五号、明治十七年八月刊。

八、『法令全書』内閣官報局刊。

九、前掲同書。

一〇、明治二十九年七月刊。

一一、明治二十九年六月刊。

一二、学位記の形式は、注九前掲同書にある。

一三、門田重雄編『論文総覧日本の博士研究』昭和二年十二月刊には、文学博士の第十五人目に井上田了の名を掲載するが、その書名に論文総覧と冠しながらも、論文名を記さず、南条文雄の下に「評」と略称するのに並べて「同」と記し、いずれも、大学院入学者と同等以上の学力で帝国大学の評議会を経て授けられた博士であることを示唆している。

一四、高島米峰『恩師の面影』東洋哲学第二六篇第七号、井上田了先生号所収、同『本願寺物語』実業之日本社、昭和六年一月刊、同『井上田了先生を憶ふ』東洋学苑、特別号、東洋大学と学祖井上先生、東洋大学学友会雑誌部、昭和八年三月刊、同『井上田了先生を想ふ』現代佛教、十周年記念特別号、明治佛教の研究・回顧、昭和八年七月刊。東洋哲学第二六篇第七号には、

その他菴名慶一郎、亀谷聖馨、塚原政次、小柳司氣太、島地大等も同様に言う。

一五、管見によれば、増谷文雄『明治高僧伝』日本佛教聖者伝第一〇巻、日本評論社、昭和一〇年四月刊、日本仏教史Ⅲ第二章
吉田久一『明治期の仏教』法蔵館、昭和四十二年九月刊。常光浩然『明治の佛教者』上、春秋社、昭和四三年九月刊、宮本正
尊『明治仏教の思潮——井上円了の事績——』佼成出版社、昭和五十年三月刊などがそれぞれである。

一六、『外道哲学』奥付参照。

一七、『法令全書』。